



# 松実だより

## 菅野 純 先生 顧問就任ご挨拶

今年度より、松実高等学園の顧問にご就任いただきました、菅野 純 先生よりご挨拶をいただきました。



今年度から、松実高等学園の顧問をさせていただくことになりました、早稲田大学の菅野 純(かんのじゅん)と申します。ご挨拶代わりに、私の高校時代のエピソードを書かせていただきます。

街はずれにあった公立中学校から県下一の進学校に合格したものの、はじめの一年、高校生活は不調の連続でした。各中学のトップレベルの生徒が集まるため、自己主張とエリート意識がやたらと強い同級生や先輩たちには違和感ばかり感じました。野球の試合の応援でも、相手チームを平気で「落ちこぼれ！」などとやじるのです。入学早々から大学受験をあおる先生方も受け入れ難いものでした。

私が出た中学校は、進駐軍と呼ばれた元アメリカ軍の基地に隣接しており、“不良中学校”として知られていました。学力も低く、生活も厳しい家庭が少なくありませんでした。サラリーマン家庭の“箱入り息子”だった私は、その中学校での生活の中で実に多くのことを学びました。高校進学するのが当たり前だった自分とはまったく異なる家庭背景。けんかの強い番長が自分で作った弁当をトイレでいつも洗っていたり(彼は新聞配達とゴルフ場のキャディのアルバイトをしていました)、男性経験があると噂されどこか近寄り難い雰囲気をした美少女がいたり、集団万引きで数十人近く芋蔓式に補導されたこともありました。クラスメートたちは授業中羽目を外して騒ぎ過ぎては、先生たちからしょっちゅう大目玉を食らっていましたが、生徒同士は大きないじめなどもなく、いつもにぎやかに和気藹々としていたように記憶しています。互いの家庭的背景をよく知っており、どのような“問題生徒”でも相手のことをそれなりに受け入れていたのだと思います。

一方、入学した高校では、これまでとははるかに高いレベルの授業が待っていました。教科書以外にやるべき副読本や問題集が次々と課され、すでに大学受験に向けて突き進んでいる感じでした。私は中学校では成績が学年で1・2番だったものの、高校ではまったく振るわず、授業についていくのがやっとという有様です。加えて郊外の自宅から高校まではバスを乗り継いで、約1時間かかり、体力的にも厳しかったのです。私は次第に調子を崩し、原因不明の症状に襲われるようになりました。授業中指されたり、体育の授業で皆の前で何かをするときなど、体が一瞬、脱力するのです。マヒのようになることもあります。体だけでなく、言葉もずっと発することが出来ず、吃るような発声になります。一年生の夏休みはこの原因不明の症状のため大学病院に通い、諸検査の日々でした。脳波をはじめ髄液検査などあらゆる検査を受けました。結果的には身体や神経器官に異常はありませんでした。今の医学的知識で言えば、心の葛藤やストレスからくる心身症の一つ、転換障害だったのかなと思います。

夏休みも終わる頃、麻酔によって入眠させ電気ショックによるてんかん症状を誘発させる検査を受けました。長く、苦しい検査だったことを覚えています。その日だけは、母親が付き添っていました。麻酔による睡眠から醒めたのは薄暗くなりか

けてからでした。ぼんやりと室内のあちこちに目をやると、窓辺の椅子に母が心配そうな顔をして座っていました。母は私が目を醒ましたことに気づくと、唐突に言ったのです。「高校、やめてもいいんだよ」と。私はその言葉に驚きました。母は、私の症状が精神的なものからくると何となく感じていたのです。それにしても、私の進学校入学に強い願いと期待をもって母が・・・と思いました。

母は自らは女子専門学校を出て当時としては高学歴の人でした。小中高校の教員免許を持ち、若い頃は教職に就いていました。父は農業高校を出て満州に渡り、軍隊に入って、引揚者として我が家に婿入りした人でした。職業人としては第一線から後退し、明治生まれの厳しい舅にひたすら仕えていました。母は一人息子である私に何としてでも大学に入り活躍してほしいと願ったことも、自然といえば自然だったのかも知れません。

「高校をやめてもいい」という母の言葉を聞いた時、私の中に「母はここまで言うんだ」という意外な気持と共に、肩の荷がどっと落ちたような解放感が湧いてきました。自分で自分の道を自由に選択できる！と思ったのです。不思議なことにそう思った瞬間、心の中に「もう少し、がんばろう」というエネルギーが湧いてきたのです。その夏以降、私はその高校でそれなりの成績を保ち、生徒会活動などで活躍するようになったのです。

母は70歳過ぎた頃から認知症になり、今から15年前、85歳で他界しました。母があの時、何を、どう考えていたのかは、ついに聞くことが出来ませんでした。

・・・菅野 純 先生のご紹介・・・

早稲田大学人間科学部専任講師、助教授を経て人間科学学術院教授。学校スーパーカウンセリング、臨床心理学などの授業、ゼミ指導。  
並行して東京都、神奈川県、埼玉県の教育相談機関のスーパーバイザー、学校コンサルテーションを行う。

ご著書に「子どもの心を育てる『ひとこと』探し」、「教師の心のスイッチ」、「不登校一予防と支援 Q & A70」「わが子のやる気スイッチはいつ入る？」他多数。

## 中等部の授業紹介～生徒の個性を伸ばす選択コース～

中等部では午前中の主要科目の授業に加えて、午後に生徒の好きや得意が伸ばせる選択コースを開講しています。ジュピター（英語、国語、数学）で学力を伸ばすもよし、スポーツコースで体を動かすのもよし。情報コースではパソコンを使って文書を作成したり動画を編集したりする生徒もいます。創作芸術コースでは、手描きだけでなく、デジタルでイラストを描く生徒が多いです。他にもレクリエーションコースやビューティーコースなど、自分の個性が伸ばせる授業がたくさんあり、生徒たちは選択コースでの学びを楽しんでいます。

